

## バフチンのテキスト理論の根底にあるもの

佐々木 寛

人間が、みずからの現実の状況に完全にはおさま  
りきらないように、世界もまた、それについて語  
る言葉のうちに完全にはおさまりきらない。

—バフチン「小説の言葉の前史より」

### はじめに

1959年から61年にかけて書かれた草稿「テキストの問題」<sup>(1)</sup>は、記号ならびにテキストについてのバフチンの考え方が凝縮したかたちで述べられている、重要な著作である。しかも見かたによってはこの草稿は、かれの仕事全体の要に位置する著作、かれの思想のエッセンスと呼んでもおかしくないような著作なのである。

バフチンの生涯をつうじて変わることのなかった、存在と意味についての基本的な考え方をあきらかにすること。そして、その考え方をふまえながら、草稿「テキストの問題」に述べられているかれのテキスト理論を読みとくこと。以上が、この論文で筆者のめざすところである。

そのための手続きとして、まずはじめに草稿「テキストの問題」がバフチンの仕事全体のうちにしめている位置の検討をおこない、つぎに、かれの最初期の著作から晩年の著作まで一貫してみとめられる、存在と意味についての基本的な考え方をあきらかにしたうえで、この草稿を個々の部分にそくして読みといてゆくことにする。

### I

1920年代初めから70年代前半までの、50年あまりにもおよぶバフチンの仕事の全体の流れを、それぞれの時期にかれがとりこんでいた問題にそくして大づかみに整理してみるならば、大体つぎのようにまとめることができるだろう。

#### 1. 1920年代初めの行為の哲学の時期（哲学的人間学）

19世紀末から20世紀の初頭にかけて隆盛をきわめた新カント学派の哲学が、急速な凋落をむかえたあと、1920年代初めの哲学に課せられていたのは、哲学のモデルの転換という問題だった。それはひとことでいうならば、「認識」のモデル（自然科学の認識の原理である主観・客観モデル）<sup>(2)</sup>から、「行為」のモデル（世界のうちで行為する主体の問題）に哲学をきりかえることによって、哲学が陥っていた行き詰まりの状態を打開し、生きた人間の経験がもつ歴史的な一回性の問題をすくいあげようとするころみだったのである。

1920年代初めの草稿「行為の哲学」<sup>(3)</sup>は、哲学者としてのバフチンの出発点をしめす重要

な著作であるが、そこで論じられているのは、ほかでもないこの哲学のモデルの転換の問題なのである。この草稿でかれが言っているのは、近代の哲学が理論的な認識の世界だけで完結する方向にむかった結果、われわれの責任ある行為がおこなわれる場の問題、生きた一回かぎりの歴史性の問題を、哲学があつかうことができなくなってしまった、そのことにたいする反省なのである。そのばあいによりもまず求められていたのは、世界のうちで行為する主体というモデルでもって、具体的で歴史的に現実的な一定の行為、志向し行為する意識をとりあげることができるような哲学の世界を構築するところみだったのである。

これにつづく同時期の草稿「作者と主人公」<sup>(4)</sup>はもともと、草稿「行為の哲学」を序論として構想された大部の哲学書の一部として書かれたもので、新カント学派の哲学、生の哲学、現象学、宗教哲学が渾然一体となった一般美学の論文である。以後のパフチンの仕事全体のベースになっている著作として、やはり重要なものである。この草稿でかれが言っているのは、美的なできごととしての作品をかたちづくるのが、内側から生きられた主人公の生の世界（主人公の生の能動性）と、これを外側から美的に完結させて存在の新たな平面に生みだす、作者の見る眼の余裕（作者の美的な能動性）という、レベルのことなる二つの能動性の出会いであって、そのいずれが欠けても作品のもつ美的なできごとはうしなわれてしまう、ということである。そこから、感情移入の美学と素材主義の美学の双方にたいする原理的な批判がおこなわれるわけだが（後者の批判は分量としてはわずかである）、そのばあいに立論の核になっているのは、実生活では現に誰もが体験しているながら、「認識」のモデルでは捨象されてしまう、内側から生きられたわたし（я для себя）と外側から見られたわたし（я для другого, другой для меня）のあいだのずれの問題である。空間的、時間的、意味的に完結することのない、内側から生きられたわたしの生の世界と、空間的、時間的、意味的に完結したものとして他人には体験される、外側から見られたわたしの生の世界とのあいだのずれがもつ積極的な意味にパフチンは注目する。このずれがことにはっきりと意識されるのは、身体にかんしてである。すなわち、内側から体験される身体（内的自己感覚、情動・意志、言語化された内的身体 etc.）と、外側から見られた身体とのあいだのずれの問題としてである。世界のうちで行為する主体というのも、したがって、ただの抽象的な点ではなく、このずれをふくんだ、あるひろがりをもった生きた身体として考えられているのである。

ロシア・フォルマリズムの美学にたいする批判として書かれた1924年の草稿「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」<sup>(5)</sup>は、草稿「作者と主人公」の延長上に位置する論文であり、おなじく観念論の美学のスタイルで書かれているけれども、作品の素材としての言語を問題にしている点で、それは行為の哲学から言語哲学に転換する途上にある著作というふうに見ることができる。

## 2. 1920年代後半の言語哲学の時期（イデオロギー記号の社会学）

イデオロギー記号としての言語をめぐって、パフチン・サークルのヴォロシノフとメドヴェージェフが1920年代後半にマルクス主義のスタイルで公刊した一連の著作、ヴォロシノフの「生活の言葉と詩の言葉」（1926）、同『フロイト主義』（1927）、メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』（1928）、ヴォロシノフの『マルクス主義と言語哲学』（1929）はいずれも<sup>(6)</sup>、ソビエトの記号学者ヴァチャスラフ・イワノフの1970年代初めの発言<sup>(7)</sup>をき

っかけにして、バフチンが友人の名前をかりて公にした著作であるというふうに考えられてきたわけだが、近年になって、これまで不明な点の多かったヴォロシノフとメドヴェージェフの生涯があきらかにされた結果、現在のロシアでは、これらの著作は基本的にかれら自身のものとしてあつかうようになってきている。しかし、これらの著作の成立にバフチンが密接に関与していることも事実であり、また1929年の『ドストエフスキ論』初版<sup>(8)</sup>以降のバフチンの仕事が、これら一連の著作にみられるイデオロギー記号としての言語の問題をさらに発展させるものになっていることを考えるならば、これらの著作は、バフチンを中心にしてサークルのメンバーが共有していた言語哲学が、それぞれにかたちをとって現れたものと見てさしつかえないだろう。

ここでおさえておかなければならないのは、なぜバフチンが、1920年代前半の行為の哲学、つまり世界のうちで行為する主体というモデルから、言語哲学に転換しなければならなかったのかという問題である。

草稿「作者と主人公」のばあい、主人公の生の能動性と作者の美的な能動性の出会いがかたちづくる美的なできごととしての作品、という考え方のもとになっているのは、すでに述べたように、世界のうちで行為する主体がもつ、内側から生きられたわたし（未来にむかってひらかれている生）と外側から見られたわたし（現在において完結している生）とのあいだのずれの問題なのである。けれども、この「行為」のモデルが前提にしているのは、対象とともに世界のうちにある単独の意識、対象とかわる一個の主体としてのわたしであって、世界のなかで自分とは別のもうひとつの（あるいは複数の）意識と関係するわたしなのではない。しかもそのばあいの世界というのは、生きた歴史的現実としての世界なのではない。それは、生きた現実の社会のなかでの、複数の行為する意識の関係なのではない。

生きた現実の社会のなかでの、複数の行為する意識の関係というのは、ある課せられた社会的状況のもとでの、なにかある対象をめぐる、複数の主体、複数の意識のあいだの関係のできごとなのであって、それは、それぞれの主体による、しかるべき言葉をともなった行為のかたちで表現される。行為と言葉はそこでは不可分であって、たとえば、行為のみで一言も発せられなかったばあいでも、そこでは複数の意識が内的な発話（内言）のレベルでせめぎあっているわけだし、反対に、言葉だけで具体的な行動はともなわなかったばあいでも、その言葉は、状況の解決という意味で、立派な行為なのである。したがって、生きた現実の社会における複数の主体、複数の意識の関係のできごとというのは、現実社会にたいしてひらかれた発語の場での、複数の行為する意識の出会いというふうに考えることが可能なわけである。

問題は、発語の場におけるこの複数の行為する意識（未来にむかってひらかれている意識）の関係を、どのようにして記述すればよいのかということなのである。そのばあいに、この複数の意識する主体をひとしくおなじ視野におさめるような空間的モデルというものを想定してはならない。それは結局のところ、発語の場を、話し手Aから受け手Bにできあいの情報Xを伝達する回路として記述することになるからだ。そうではなくて、記述する者自身も発語の場に参与して、複数の行為する意識の関係のできごとを構成する要因となるような、そうしたモデルが必要なのである。バフチン・サークルの一連の著作は、それを、生きた歴史的現実のたいしてひらかれた社会的記号としての言葉（СЛОВО）<sup>(9)</sup>の上での、さ

まざまなアクセント、イントネーション（すなわち社会的評価）<sup>(10)</sup>の交差というかたちで提起したわけなのである。（複数の声が、ひとつの言葉のうちに響くということ。記者はそれを聞きとらなければならない。内言の問題。）

『マルクス主義と言語哲学』では、日常生活のさまざまな場面に即応した「ことばのジャンル」という概念が導入され、発話と発話を生み出す社会的現実との関係が、説得力をもって論じられているわけだが、しかしそこであつまっているのは、もっぱら実生活の発話すなわち一次的なことばの問題なのである。「ことばのジャンル」の問題は、生きた社会的現実との関連では提起されているものの、このジャンルがになう歴史的、文化的な記憶の問題はあつかわれていない。言葉の生を真にゆたかなものにする二次的なことばの問題<sup>(11)</sup>は、まだとりあげられていないのである（『文芸学の形式的方法』は原理的に問題を提起しているだけで、具体的な分析はおこなっていない）。テキストのなかにとりこまれた二次的な発話としての、小説の言葉の問題、さらにこの言葉が生きる言語的環境としての、歴史的、文化的な記憶（ジャンルの記憶）の問題にバフチンが本格的にとりくむようになるのは、1930年代に入ってからである。

1929年の『ドストエフスキ論』初版は、1920年代後半のバフチン・サークルの言語哲学をふまえることで初めて可能な著作であったと同時に、1930年代に展開されることになる小説の言葉論、小説の時空間論、ジャンル論を予告するものだったのである。

### 3. 1930年代の小説理論の時期（小説の言葉論、クロノトポス論、ジャンル論）

この時期のバフチンの仕事としてあげられるのは、「小説の言葉」（1934-35）、草稿「ゲーテと教養小説」（1936-38）、「小説の時空間」（1937-38）、学位請求論文「リアリズム史上のフランソワ・ラブレー」（1940/1965）、「小説の言葉の前史より」（1940）、「叙事詩と長篇小説」（1941）その他である<sup>(12)</sup>。

言語哲学の問題としてみるならば、バフチンはこれらの著作において、直接コミュニケーションをおこなうばあいの一次的なことばから、二次的なことばのレベルに、つまりテキストのうちにとりこまれた他者の発話、描写される他者の言葉の研究に移行したのだということができよう。また、美学および詩学の問題としてみるならば、それは一般美学、理論詩学の領域から、歴史詩学の領域、すなわちスタイルやジャンルの変遷、発展を歴史的に跡づける作業に移行したのだということができよう。

「小説の言葉」では、個々の作家や流派の文体をより根本のところ規定しているジャンルの文体、——「ジャンルの運命と結びついた芸術の言葉の大きな歴史的運命」<sup>(13)</sup>という観点から、他者の言葉の伝達と描写、引用、話法の問題が、日常生活の発話と芸術的散文の双方をふまえて論じられており、さらに小説における他者の言葉の描写のさまざまな例が具体的に示されている。また、ヨーロッパ小説の二つの文体の流れ、つまり言語的多様性を小説の外に意識している文体と、それを小説の中にとりこんだ文体の双方が、歴史的に跡づけられている。

「小説の言葉の前史より」は、小説の言葉の歴史的な起源を、古代ギリシャおよびローマにおける笑いの文化と、多言語性の問題にさかのぼって論じたもので、それは中世ラテン語のパロディー文学に受けつがれ、やがてそれが近代の小説の言葉を準備することになったの



だとバフチンは述べている。

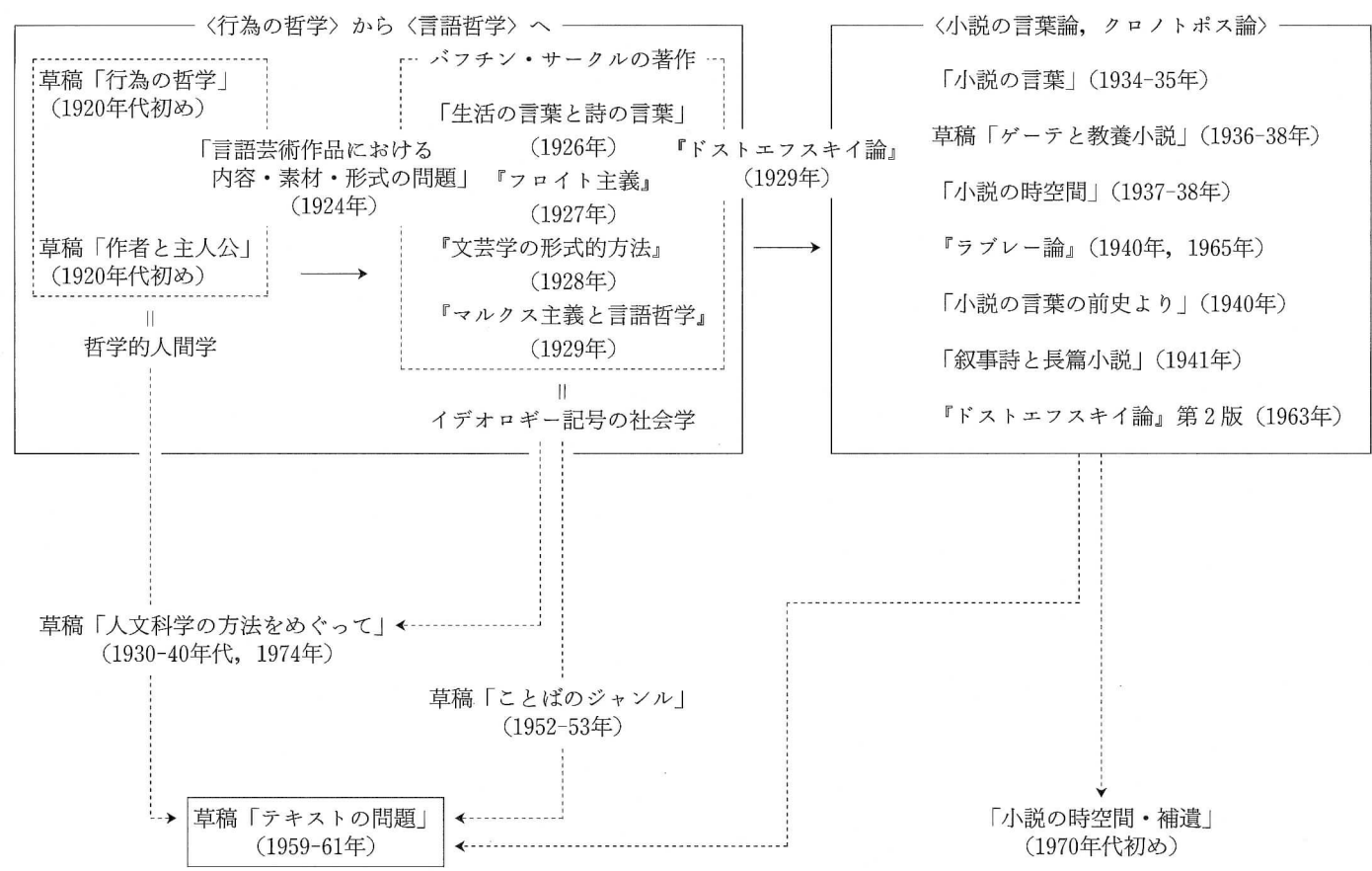
これにたいして、「小説の時空間」で論じられているのは、「実在の時間・空間を小説のうちに芸術化し自らのものとする」<sup>(14)</sup>方法としての、小説の時空間（クロノトポス хронолог）の問題である。現実の世界に発しながらも、主人公が行為する環境として作品のうちに昇華されたクロノトポスは、文学の各ジャンルを決定すると同時に、文学のなかの人間像をも決定することになる。古典古代の土壤に生まれた三つの小説のタイプとそのクロノトポス——試練の冒険小説（冒険譚的時間）、冒険風俗小説（冒険譚的時間と日常的時間の結合）、伝記小説（伝記的時間）が、以後のヨーロッパ小説の歴史のなかでさまざまに姿を変えながら生きつづけてゆく様子が、十九世紀の小説までたどられている。

草稿「ゲーテと教養小説」は、近代における小説のクロノトポスの歴史的な発生の問題を論じたものである。現実の具体的な土地とむすびついた歴史、そして世界とともに形成されてゆく人間、みずからのうちに世界そのものの歴史的な形成を反映している人間が、ゲーテの小説で創りだされたというのである。

以上の四論文がいずれも、テキストのうちに描きだされた世界の成分としての、小説の言葉ならびにクロノトポスの問題をあつかっているのにたいして、「叙事詩と長篇小説」でとりあげられているのは、テキストの枠組みとなるジャンルの問題である。バフチンがそこで言っているのは、叙事詩をはじめとする古典文学の各ジャンルがいずれも、すでに完成されてできあがったものとして、相互に補完しあいながら有機的な統一体をかたちづいているのにたいして、ひとり小説だけは、現実世界とともに生成する唯一のジャンルとして、この統一にはくわわらずに、他のジャンルをパロディー化し、その形式や言語の約束性をあばきたてる機能をもっているのだということである。また、叙事詩の世界が、絶対的な過去の世界として、歌い手や聴衆からは叙事詩的な距離でへだてられているのにたいして、ジャンルとしての小説を支配しているのは、描かれる対象と作者と読者のあいだの同時代的な接触の感覚であり、その根底にあるのは、フォークロアから汲みとってきた民衆的な笑いの原理なのだということである<sup>(15)</sup>。

学位請求論文「リアリズム史上のフランソワ・ラブレー」は、人類の歴史のうちに脈打つこの民衆的な笑いの原理、民衆の笑いの文化の問題を、「カーニバル的世界感覚」「グロテスクリアリズム」といった独自の概念をもちいて、広く文明論的な視野のもとに論じた研究である。なお、1963年の『ドストエフスキ論』第2版第4章で論じられているメニッペアのジャンルの問題は、「叙事詩と長篇小説」のなかですでに提起されていたものである。また、1970年代初めの「小説の時空間・補遺」も、テキストのうちに描きだされた世界とテキストを創りだす世界との関係を原理的に考察したものとして、おなじく1930年代の小説理論の延長上に位置づけられる仕事である。

以上、バフチンの著作を、1920年代初めの行為の哲学から、1920年代後半の言語哲学への転換、そして1930年代の小説の言葉論、クロノトポス論、ジャンル論の探究という流れのなかでたどってみた。それを図で示せば、次ページのようになる。1959—61年執筆の草稿「テキストの問題」は基本的に、この三つの時期の問題群をふまえながら、新たにそれをテキスト理論のレベルで統合するところみであったというふうに考えることができるのである。そ



のことをこれから具体的に検証してゆくわけだが、そのまえにまず、初期の草稿から晩年の仕事まで、バフチンの生涯をつうじて変わることのなかった、存在と意味についてのある基本的な考え方をあきらかにしておかなければならない。

## II

存在と意味についてのバフチンの考え方が端的に示されているのは、1920年代初めに書かれた最初期の草稿「行為の哲学」の、冒頭の部分である。少し長くなるが以下にその箇所を引用してみよう。

「推論的な理論的思考（自然科学や哲学の）、歴史的な記述・描写、美的な直観に共通して認められる要因で、われわれの課題にとって重要なのは次のことである。すなわち、これらの活動はどれもみな、所与の行動・活動がもつ内容・意味と、その行動・活動の存在の歴史的な現実性、その行動・活動が現に一回かぎり体験されることとのあいだに、原理的な区別をもうける。その結果、行動はみずからが担う価値を失い、生きた生成と自己完結との統一を失うことになる。真に現実的なもの、唯一の存在のできごとに参与するものは、もっぱらこの行動の全体なわけで、ただこの行動だけが、生きたもの、そっくりそのまま〔？〕果てしもなく現存するもの、生成し実現されるものなのである。行動は存在のできごとへの、現実の生きた参加者なのであって、実現されつつある存在の、唯一の統一に参加するわけなのだが、しかしこの参加は行動の内容意味の面にまでは及ばない。行動の内容意味の面は、学問、芸術、歴史といった個々の意味的な領域として、あくまでも自己完結することを主張するからである。そしてこれらの客観的な領域は、先に述べたように、それを〔存在に〕参加させる行動を抜きにしては、それ自体で現実のものにはならないのである。かくして、互いに対立する二つの世界、けっして相互に交流し浸透することのない二つの世界が立ち現われることになる。文化の世界と、生の世界（われわれが創造し、認識し、観照し、生き、そして死んでゆく唯一の世界）である。われわれの活動・行動が客観的なかたちをとって現われる世界と、この行動がただ一回、現実経過し遂行される世界である。われわれの活動・行動、われわれの体験・行動は、あたかも双面のヤヌスのごとくに、文化の領域という客観的な統一と、体験される生という繰り返しのきかない唯一性との、べつべつの方向にむいているわけなのだが、しかしこの二つの顔を互いに一個の統一へとまとめあげるような、そうした単一で唯一のレベルというものが存在しないのである。この二つのものを統一しうるのはただ、遂行される存在という唯一のできごとだけなのであって、理論的なもの、および美的なものはすべて、このできごとを構成する要因として定義されねばならないのである。もちろん、もはや理論的また美的な用語としてではなしに。行動がその意味と存在との双方に自身を投影するためには、行動は単一のレベルを見出さなければならない。内容への責任（特殊な目的をもった責任）と、存在への責任（倫理的な責任）という、両方向での責任の統一を見出さなければならないのである。しかもこの特殊な目的をもった責任というのは、単一で唯一の倫理的な責任にあずかるような要因でなければならない。そのときに初めて、文化と生とが融合しえず相互浸

透を欠いたままの悪しき状態は、克服されるはずなのである。」(邦訳 19-21ページ。〔?〕は原文テキスト編集者、〔 〕は訳者)

一行目にあげられている「推論的な理論的思考」、「歴史的な記述・描写」、「美的な直観」の行為は、それぞれ真、善、美という価値にかかわる活動であり<sup>(16)</sup>、したがって、この三つでもって、世界のなかでの人間の活動全体をあつかうことになる。

バフチンがここで問題にしているのは、次のようなことである。すなわち、これらの活動はいずれも、近代の認識の理論(モノロギ的な世界認識)にしたがって、客観的なもの、再現され反復されるものとしての「内容・意味」の面と、「行動・活動が現に一回かぎり体験されること」の面に原理的に区別されてしまい、学問、芸術、歴史が、客観的な内容意味の領域、理論化された文化の世界だけで自己完結する方向にむかった結果、行為の主体が世界のうちにしめる位置の唯一性の問題、およびこの事実のもつ道徳的な意味の問題が、切り捨てられてしまった。そのために、理論化された文化の世界と、行動が現に一回かぎり体験される生の世界とをつなぐ原理が失われてしまい、「文化の領域という客観的な統一と、体験される生という繰り返しのきかない唯一性」とのあいだに、深淵が生じてしまった。理論は行為から遊離して、その内在的な法則にしたがって発展をとげる一方で、理論を手放した行為のほうは、プリミティブな生物学的、経済学的動機づけのレベルにまで退歩してしまったのである。バフチンは、現代における行為の危機の意味をこのように捉えたとうえで、それを克服するために、文化の世界と生の世界の分裂を、責任ある行為のレベルでいかにして統一するかという問題にとりくむ。そしてそれは煎じ詰めれば、文化の世界と生の世界をともに根拠づけるような第一哲学を、どのようにして構築すればよいかという問題になるはずなのである。

今度は、バフチンの晩年の著作を見てみよう。1930年代の後半に執筆された「小説の時空間」の補遺として、70年代の初めに書き足された第十章のなかの、テキストを創り出す世界と、テキストのうちに創り出された世界の関係を論じている箇所である。

「作品が音として響き、手稿や書物が実在するこのまったく現実的な時間と空間のうちに、音となった言葉や手稿や書物の創り手である現実の人間も存在するし、テキストに聴き入りテキストを読み解く現実の人間も存在する。むろん、これらの現実の人間——作者と聴き手・読者——は、べつべつの時間・空間にあることもありうる(また、それがふつうである)、それも、どうかすると、幾世紀もへだたった、空間的にもはるか遠隔の地に。しかし、それでもやはり、これら現実の人間は、唯一の実在の世界、完結することのない歴史的世界のなかにいる。そしてこの世界は、テキストのうちに描き出された世界とは、原則的な境界によってはっきりと切り離されている。そこで、この実在の世界は、テキストを創り出す世界と呼ぶことができる。なぜなら、テキストのうちに反映されている現実も、テキストを創り出す作者も、テキストを実演する者も(もしかれらがかわりをもつなら)、最後に、テキストを復活させ、この復活の過程でテキストを新たに作る聴き手・読者も、すべてが、テキストのうちに描き出される世界の創造にひとしく関与するからである。」(邦訳 337ページ)

ここにみられる、テキストを創り出す世界と、テキストのうちに創り出された世界という問題の立て方が、上に引いた草稿「行為の哲学」の、生の世界と文化の世界の乖離の問題をふまえていることはあきらかだ。モノとしてのテキスト（音となった言葉、手稿、書物）、テキストを実演する者、創り手である作者、聴き手・読者、モデルになった現実——これらはすべて、唯一の实在の世界、未来にむかって開かれた歴史的世界のなかにあるのに対して（バフチンは、この实在の世界が、時代や所を異にするばあいでも一つに繋がっているのだという）、テキストのうちに創り出された世界のほうは、美的に完結していて、閉じているのである。

ただし、「行為の哲学」では行為の問題が、世界の中で対象とかかわるわたしの意識（内側から生きられたわたしと、その責任）のレベルでしか考えられておらず<sup>(17)</sup>、また、生の世界と文化の世界の乖離ならびにその克服の問題も、もっぱら抽象的に論じられているだけだったのに対して（両者を統一するものは「遂行される存在という唯一のできごと」すなわち行動なのだという）、ここでは、テキストを創り出す世界と、テキストのうちに描き出された世界という、二つのクロノトポス（時空間）のあいだの次元のちがいがふまえられており、同時に、両者の連続性の問題<sup>(18)</sup>もまたおさえられている。二つのクロノトポスの次元のちがいをふまえながら、言葉、テキストという場での、複数の行為する意識（作者、主人公、演者、聴き手・読者）の交通の問題が考えられているわけなのである。そうしてさらに、テキストを創り出す世界のうちでの、テキストとテキストの出会い、テキスト同士の対話、テキストの連鎖の問題もおさえられているのである（一次的なことばではなく、二次的なことばの伝達の場の問題として）。

未来にむかって開かれた、完結することを知らない唯一の实在としての生の世界と、活動・行動が客観的なかたちをとって現われる文化の世界と——これこそが、行為の哲学から言語哲学への転換というプロセスを経ながらも、バフチンの生涯をつうじて変わることのなかった、存在と意味についての基本的な考え方なのである。それは、例えば、この論文のエピグラフとしてかかげた、1940年の論考「小説の言葉の前史より」の一節にも、読みとることが可能であるし（邦訳 145-146ページ）、1941年の論考「叙事詩と長篇小説」のうちにも、やはり認められる考え方なのである<sup>(19)</sup>。

### III

論者は、Iにおいて草稿「テキストの問題」がバフチンの仕事全体のうちにしめている位置を検討し、ついでIIにおいて、存在と意味についてのバフチンの基本的な考え方をあきらかにした。以上のことをふまえながら、バフチンの著作のなかでもけっして分かりやすいとは言えないこの草稿を、個々の部分にそくして読み解いてゆくことにしよう。

「所与の領域の言語コミュニケーション（テキストの連鎖）のなかにある発話としてのテキスト。所与の意味的領域の（究極的には）すべてのテキストをみずからのうちに反映する、独特なモナドとしてのテキスト。すべての意味は相互にむすびついている（それらが発話として実現されるかぎり）。」（邦訳 196ページ）

例えば、学術論文のばあい。著者はある問題について、関連する先行研究（諸々のテキスト）を一通りおさえたうえで、自身の所見を新たに提示し、それによって問題を一步前進させようとする。そのため、そのテキストはおのずから、当該領域の、究極的にはすべてのテキストを反映したモナドとしての性格をもつことになる。学問研究のクロノトポス（時空間）というのは、そうやって生み出された一回一回のテキストの、連鎖なのである。しかも、新たに生み出されたそのテキストは、著者の当面の意図（小さな時間のなかでの意図）をこえて、当該領域のすべてのテキストと対話的な関係に入り、新たな意味をそこにつくり出す。クロノトポスの更新ということ。大きな時間の問題。

あるいは、実生活の発話のばあい。例えば、二人の人物のあいだにこんな会話があったとする：「いやなの？」「どうしても……」「どうしても？」「どうしても。」

「どうしても」というこの言葉は、これまでに無数の人物の口から、無限回といってよいくらい発せられてきたものであって、語の客観的な意味（語義）からいえば、それ自身はほとんど内容のない言葉である。けれども、ある状況のもとに、ある何らかの問題をめぐって、二人のあいだで三度つづけて発せられたこの同じ言葉（だがイントネーションは三つとも異なる）は、それぞれが、その問題にかんする先行の発話の連鎖をそっくり反映している十全な発話なのであり、それぞれが、状況を新たに切りひらく歴史的に一回かぎりの発話なのである。

「さて、いかなるテキストの背後にも言語体系がある。テキストのなかでこれに相当するのは、反復され再現されたもの、および反復され再現されうるものすべてであり、テキスト抜きで与えられるもの（所与）すべてである。だが同時にいかなるテキストも（発話としては）なにかしら個別的な、唯一の、一回かぎりのものであり、この点にテキストの意味（テキストがつくられた意図）のすべてがある。それはテキストのなかで、真、善、美、歴史にかかわるものである。この要因にたいして、反復され再現されるものはすべて素材であり手段にすぎない。それはある程度、言語学や文学の枠をこえている。この第二の要因（極）はテキスト自体に本来そなわっているのだが、それが開示されるのは状況やテキストの連鎖（所与の領域の言語コミュニケーション）のなかだけである。この極は、言語（記号）体系の諸要素（反復されるもの）とではなく、別の（一回かぎりの）諸テキストと独特な対話的（作者を捨象するなら弁証法的）関係でむすびついている。」

（邦訳 197ページ）

「自然界で唯一のもの（たとえば指紋）とテキストの意味の（記号としての）一回性。指紋はただ機械的に（好きな数だけ）再現される。もちろんテキストも（たとえば復刻の場合のように）機械的に再現することは可能だが、主体のおこなうテキストの再現（テキストに帰ること、再読、新たに演じること、引用）は、テキストの生の新たな一回かぎりの出来事となり、言語コミュニケーションの歴史的な連鎖の新たな環となる。」

（邦訳 199ページ）

バフチンがここで言っているのは、テキストを構成する二つの極の問題——テキストの言語体系の極と、テキストの意味の一回性の極の問題である。

人文研究はすべて、テキストという第一次的な与件をみずからの出発点とする以上、第一の言語の極をめざすか、それとも第二の、テキストの意味の一回性の極をめざすかのいずれかであるとバフチンは言うのだ。

テキストの意味の一回性というのは、集団の約束ごととしての社会的な言語（反復される記号体系）によって実現されるものであって、自然の偶発的な一回性とは別のものである（テキストの背後に言語がないばあい、叫び声や呻き声のように、言語として反復されないものでできているばあい、それはもはや非記号的な自然現象である）。それは作者という要因をもち、できごとの歴史的な（社会的な）一回性として、つねに二つの意識、二つの主体のはざままで生ずる。それは二つのテキスト（すでにあるテキストと、作りだされ応答するテキスト）の出会いであり、二つの主体、二人の作者の出会いなのである。この「テキストの生の新たな一回かぎりの出来事」が生ずるのは、テキストをつくり出すクロノトポス（時空間）の歴史的連鎖のうちでなのである。

テキストの再読の問題。再読されたテキストの意味は、最初に読んだときのそれと同じではない。そのテキストを読んでしまったわたしは、読む前のわたしと同じではないからだ。何が書かれているのか判らずにテキストを読むばあいと、内容があらかじめ判っていて読むばあいとでは、そもそもテキストの理解の質がちがうわけだし、最初に読んだあとにわたしは、自分の感想を言葉にする（作りだされ応答するテキスト）。それを今度は、当のテキストをめぐるさまざまな評価とつきあわせてみたりする。つまりそこに、新たなテキストの連鎖が生じるわけなので、最初に読んだときのテキストの意味（応答として作り出されるテキスト）と、再読したときのそれとは、テキストをつくり出すクロノトポスの歴史的連鎖の、別々の環になるからである。

「客体としての性質をもたない純粋な単一の声の言葉は、文学においてどの程度可能なのか？ 作者が他者の声を聞くことのない言葉。そこにいるのは作者だけで、彼がすべてであるような言葉。そのような言葉が、文学作品を構築するための素材となることはあるのか？ 客体としての性質をある程度もつことが、あらゆる文体の必須条件ではないのか？ 作者はつねに、芸術作品の素材となる言語の外にいないのではないか？ どん<sup>オーバーラス・アフトラ</sup>な作家も（純粋な抒情詩人でさえも）、すべての言葉をさまざまな他者の声——作者の形象もそのひとつ（さまざまな作者のマスクでも同じ）——に割りあてるといふ意味では、つねに《劇作家》ではないのか？ おそらく、客体としての性質をもたない単一の声の言葉は、どれもみな素朴にすぎて、真の創造には役立たないはずだ。真に創造力をもつのはつねに、言葉のなかの**第二の声**である。第二の声——純粋な関係——だけが、あくまでも客体としての性質をもたないのであり、実体的な形象の影を投げかけないのだ。作家とは、言語の外に身を置きながら言語で仕事をする者であり、間接的にもものを語る才能である。」

（邦訳 206ページ）

この箇所では論じられているのは、文学作品の素材である言葉のレベルでの、作者の位置の問題である。小説の言葉が、言葉についての言葉として生み出されるさいの、言葉のなかの第一の声と第二の声の関係の問題、描写される言葉にたいして作者の言葉がしめる、外在の



位置の問題なのである<sup>(20)</sup>。草稿「作者と主人公」では、主人公にたいする作者の空間的、時間的な外在の立場として論じられていたものが、ここでは作品の素材である言葉のレベルでの、第一の声と第二の声の関係の問題に転換されているのである。そのばあいの第一の声というのは、「客体となり素材となる言葉の肉体」（「テキストの問題」邦訳 207ページ）のことであり、これに対して、第二の声すなわち「創造者の人格は見られることも、聞かれることもなく、内部からのみ経験され、組織される——すなわち見、聞き、動き、記憶する人格として、肉化された能動性ではなく肉化する能動性として。それがその後初めて、形式を与えられた対象に反映されるのである。」（「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」邦訳 453-454ページ）

「客観的世界を主観的に反映したものとしてのテキスト。テキストとは、何ものかを反映している意識の表現である。したがって、テキストがわれわれの認識の客体となるときには、反映の反映が問題になる。テキストを理解するとは、反映されたものを正しく反映することである。他人が反映したものをとおして、反映された客体に到達するのだ。」

（邦訳 212-213ページ）

この箇所は、テキストの正しい理解というものが存在するのか否かの問いに対する、答えになっている。テキストの理解というのは、送り手の側にあらかじめ出来合いの情報Xが有って、それがテキストのうちに符号化され、受け手の側はただそれを忠実に再現するだけ、ということではないのだ<sup>(21)</sup>。「他人が反映したものをとおして、反映された客体に到達する」というのは、テキストを介しての洞察ということであって、言及されている当の対象やことがらをめぐって、送り手の意識と受け手の意識が、テキストという場で対話的に出会うことなのである。観察のばあいには、正確さということが問題になるのに対して、洞察のばあいには、その深さが問題になる（その方向が正しいものでなければならぬのは勿論だが）。

「作中人物のことが属する意味の平面と、作者のことが属する意味の平面とのちがひ。作中人物は、描かれている生の参加者として語る。いわば、部分的な立場から語るわけで、いずれにしろ、その視点はかぎられている（作者よりも知るところが少ない）。作者は、描かれている（ある意味では彼の創造した）世界の外にいる。作者はその世界全体を、質的に異なったより高次の立場から理解している。すべての作中人物とそのことが、作者の関係（および作者のことが）の対象となるのだ。だが、作中人物のことがの平面と作者のことがの平面が交わる場合もありうる。つまり両者の対話的な関係も可能である。ドストエフスキイの小説では、人物はイデオログであり、作者と主人公（思考するイデオログ）は同じ平面に位置している。作中人物のことがの対話的なコンテキストや状況と、作者のことがのそれとは根本的に異なる。作中人物のことがは、作品のうちに描かれている対話に参加するのであり、同時代の現実のイデオロギー的な対話、つまり現実の言語コミュニケーション——作品の全体はこれに参加して理解される（作中人物のことがは作品全体の要素としてのみこれに参加する）——には、じかに参加しない。それにたいして、

作者はまさしくこの現実の対話のなかでなんらかの立場をとるのであり、同時代の現実の状況に規定されている。作者がつくりだす作者の形象は、現実の作者とちがって、じかに現実の対話には参加しないが（作者の形象は、作品の全体を介してはじめてこれに参加する）、そのかわり作品の筋に参加して作中人物と対話することはある（《作者》とオネーギンの会話）。描き手である（実在の）作者のことば、もしそのようなものがあるとするなら、それは原理的にいって特別なタイプのことばであり、作中人物のことばと同一の平面にはない。ほかでもない、このことばが作品を最終的に統一し、意味づけているのであり、作品のもつ最後の言葉を決定している。」（邦訳 218-219ページ）

バフチンはこの箇所、作品と、作品をとりまく現実世界との関係を、作中人物のことばの平面、語り手のことばの平面、作者のことばの平面という観点から検討して、そのレベルのちがいを明らかにしている。これを、より細かく区分して整理してみるならば、次のようになる。(1)作中人物（主人公）のことばの平面。(2)語り手のことばの平面。(3)作品のつくり手である作者のことばの平面。(4)同時代の現実のイデオロギー的な対話の平面。(5)時代や文化を異にする読者とのあいだの対話の平面。

(1)のことばの平面を構成するのは、内側から生きられた主人公の生の視野と、その環境としての物語世界（主人公が行為し、物語の筋が展開する時空間）である。この世界の中で、作中人物たちの対話がくりひろげられ、主人公のことばはこれに参加するのである。(2)の語り手（作者の形象）は、作中の一人物であることもあれば、物語世界の外部の客観的な語り手であることもあるし、作者の〈わたし〉であることもあるわけだが、いずれにしても、この語り手を抜きにしては、物語世界全体の枠組みが成り立たない。語り手のことばの平面は、物語世界の境界に位置していて、語り手は、物語世界の内側と、外側の読者との、双方に顔をむけているのである。「創り出すが創り出されたのではない自然 (*natura creans et non creata*)」である作者との関係でいえば、作中人物が「創り出された自然 (*natura creata*)」であるのに対して、語り手は「生み出されかつ創り出す自然 (*natura naturata et creans*)」なのである<sup>(22)</sup>。(3)の、作品のつくり手である作者のことばの平面というのは、テキストのうちに描き出された世界（(1)と(2)のことばの平面からなる）と、テキストを創り出す世界（(4)と(5)のことばの平面からなる）の、双方をふまえた立場であって、それは純粋な描写の原理としての作者、作品の全体を統括する機能としての作者なのである。(4)の、同時代の現実のイデオロギー的な対話の平面を構成するのは、テキストのうちに反映された現実（モデルになった現実）と、それをめぐるさまざまなことば、作者や作品と同時代の文学的環境（同時代のさまざまな作品や批評、文学的潮流 etc.）、それに同時代の受動的な読者なのであって、作品が現実産み落とされるのは、何よりもまずこの「小さな時間」の中なのである。(5)の、時代や文化を異にする読者とのあいだの対話の平面というのは、テキストを復活させ新たに作るさまざまな時代の読者の「創造的な受容の過程、つまり創り出されたあとと作品がたえず新たに解釈される過程」（「小説の時空間」邦訳339ページ）のことであって、そこで作品は新たな生を生きることになるのである。ジャンルの記憶。「大きな時間」の問題<sup>(23)</sup>。

「言葉（そして一般にあらゆる記号）は間＝個人的である。言われたこと、表現されたことはすべて話者の「魂」の外にあり、話者だけに属するのではない。言葉を話者一人のもののみならずすることはできない。作者（話者）は、言葉にたいする固有の欠くべからざる権利をもつが、聞き手もまた固有の権利をもつし、作者が〔素材として〕とりあげる言葉のなかの声の主も固有の権利をもつ（誰のものでもない言葉など存在しない）。言葉とは、三人の登場人物が演じるドラマ（二重唱ではなく三重唱）なのだ。それは作者の外で演じられるドラマであって、作者の内部に投入することは許されない。

もしもわれわれが、言葉にたいし何も期待せず、言われることのすべてをあらかじめ知っていたならば、言葉は対話的であることをやめ、モノと化す。」（邦訳 228ページ）

言葉、そして一般にすべての記号が、間個人的なものであって、話者個人の「魂」に帰せられるものではないということは、メドヴェージェフが『文芸学の形式的方法』（1928）のなかですでに指摘していることである<sup>(24)</sup>。一個の具体的な発話というのは、(1)その話者（作者）との関係、(2)言及されている当の対象（あるいは他者の言葉）との関係、そして(3)発話が差し向けられている他者の発話との関係という、この三つの関係が一つになったものであって、それは生ける三位一体の関係なのである。そのばあい、(3)の他者の発話というのは、現に眼の前にいる聞き手の発話でもよいし、発話のコンテキストにおける第三の人間の、先行する発話でも、予期される後続の発話でもよいのだ。

われわれが、言われることのすべてをあらかじめ知っていて、言葉にたいして何も期待しないとき、言葉は対話的であることをやめてモノと化す、というのは、テキストについても同じく言うことなのである。そのばあい、テキストにたいする対話的な関係を保証するものは、テキストをとりまくコンテキスト（テキストを創り出す世界）が完結することなく、未来にむかって開かれていることなのである。対話的な関係にとって、未来への期待（危機をはらんだ未来）というのは、本質的な要因なのである。フォルマリストや構造主義者のテキスト概念にみられるモノローグ性というのも、じつはこの問題に由来するものなのである。

「どんな発話も、公正さ、真実さ、美しさ、本当らしさ（表現力豊かな発話であること）を求める。これらの価値は、発話とラング（純粋に言語学的な体系）との関係ではなく、発話と現実、語る主体、別の発話（他者の発話）との多様な関係（ことに、その発話を真実のもの、美しいものとして評価する人間との関係）で定まる。

〔中略〕純粋に言語学的な関係（すなわち言語学の対象）とは、言語体系やテキストの枠内での、記号と記号の関係（つまり、記号間の体系的ないしは線的な関係）なのだ。発話が現実、語る主体、他の発話にたいしてもつ関係、つまり発話をはじめて真実のもの、虚偽のもの、美しいもの等にするこの関係は、けっして言語学の対象にならない。個々の記号、言語体系、テキスト（記号の統一体）は、けっして真実のもの、虚偽のもの、美しいもの等にならない。」（邦訳 231-232ページ）

生きた発話としてのテキストを学問的にとりあげるばあいには、すでに見たように、テキストを構成する二つの極が問題になる。テキストの言語体系の極と、テキストの意味の一回

性の極である。バフチンがこの箇所で言っているのは、言語学があつかうことができるのが、(1)言語体系内での要素同士の言語学的な関係、および(2)個々の発話の内部での要素同士の言語学的な関係までであって、発話というできごとの一回性の問題、発話がおこなう実存的な自己投機、発話同士の対話的な関係の問題は、言語学ではあつかえない、ということなのである。これらの問題をあつかうためには、メタ・レベルの特別な言語学(メタ言語学)が必要なのである。

生きた発話としてのテキストは、それ自身の力でもって、公正さ、真実さ、美しさ、本当らしさ、といった価値をつくり出すことはできない。人が、自分の髪の毛をつかんで自分の体をもち上げることができないのと同じように、発話がもつこれらの価値も、発話自身に内在するものではなく、発話が、現実、語る主体、他の発話にたいしてもつ関係によって、初めて定まるものなのである<sup>(25)</sup>。

「どんな発話もかならず受け手をもつ(性格も、親密さや具体性や自覚の度合いもさまざまな受け手をもつ)。この受け手による返答としての理解を、言語作品の作者は求め、かつ予期する。それは第二の人間である(やはり算術的な意味での二番目ではない)。しかしこの受け手(第二の人間)とはべつに、発話の作者は至高の上位の受け手(第三の人間)を多かれ少なかれ意識している。絶対的に公正なその返答としての理解は、形而上学的なかなたに想定されることもあれば、はるかな歴史的時間のうちに想定されることもある。〔中略〕

この第三の人間はけっして、なにか神秘的で形而上学的なものではない(たしかに、ある種の世界観ではそのように表現されるけれども)。それは全一な発話を構成する本質的な要因であって、より深く分析するなら、発話のなかに見いだされるはずである。それは言葉本来の性質によるもので、言葉はつねに聞かれることを望み、つねに返答としての理解を求めて、身近な者たちの理解にはとどまらず、つねに先へ先へと(限りなく)進んでゆく。」(邦訳 236-237ページ)

人間が、みずからの現実の状況に完全にはおさまらぬと同じように、発話もまた、その現実のコンテキストのなかで完結してそっくり尽くされてしまうのではなく、それはつねに、最終審となる返答としての理解を予期している。どのような対話も、その参加者すべての上に立つ姿なき第三の人間、至高の上位の受け手を(その返答としての理解を)想定しているのである。この第三の至高の受け手というのは、神でも、絶対的真理でも、人間の良心でもよく、また、子孫や後世の人々の評価でもよい。それは、ありうべき他者による是認ということなのであって、言葉はつねに、みずからを理解し是認してくれる審級を求めて(人に聞かれ、理解され、返答され、それに返答することを求めて)、尽きることのない対話のやりとりをつづけるのである。大きな時間のなかでの復活ということ。

---

本論文で言及したバフチン、ヴォロシノフ、メドヴェージェフの著作の、邦訳のテキス

トは次のとおりである：

### バフチン

「行為の哲学によせて」(佐々木寛訳)

「美的活動における作者と主人公」(佐々木寛訳)

「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」(伊東一郎訳)

[以上、水声社版ミハイル・バフチン全著作(全七巻)、第一巻、1999年に収録]

「小説の言葉」〔ミハイル・バフチン『小説の言葉』伊東一郎訳、平凡社ライブラリー、1996年]

「小説の時空間」〔新時代社版ミハイル・バフチン著作集(全八巻)、第六巻『小説の時空間』北岡誠司訳、1986年]

「ゲーテと教養小説」(佐々木寛訳)

「小説の言葉の前史より」(伊東一郎訳)

「叙事詩と長篇小説」(川端香男里訳)

[以上、新時代社バフチン著作集、第七巻『叙事詩と小説』、1982年に収録]

「人文科学の方法論をめぐる」(新谷敬三郎訳「人文科学方法論ノート」)

「ことばのジャンル」(佐々木寛訳)

「テキストの問題」(佐々木寛訳)

[以上、新時代社バフチン著作集、第八巻『ことば対話テキスト』、1988年に収録]

『ドストエフスキイ論』第二版〔ミハイル・バフチン『ドストエフスキイ論——創作方法の諸問題』新谷敬三郎訳、冬樹社、1968年]

『ラブレール論』〔ミハイル・バフチン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、1974年]

### ヴォローシノフ

「生活の言葉と詩の言葉」(斉藤俊雄訳)

『フロイト主義』(磯谷孝訳)

[以上、新時代社バフチン著作集、第一巻『フロイト主義』、1979年に収録]

『マルクス主義と言語哲学』〔ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学』改訂版、桑野隆訳、未来社、1989年]

「発話の構造」(上・1-5章、下・6-7章、佐々木寛訳)〔研究同人誌「あず」1号、1988年7月、2号、1988年12月]

### メドヴェージェフ

『文芸学の形式的方法』〔新時代社バフチン著作集、第三巻『文芸学の形式的方法』桑野隆・佐々木寛訳、1986年]

## 注

- (1) Бахтин М.М. Проблема текста в лингвистике, филологии и других гуманитарных науках. Опыт философского анализа // Бахтин М.М. Эстетика словесного творчества. М., 1979. (バフチン「言語学、文献学および他の人文諸科学におけるテキストの問題。哲学的分析の試み」// バフチン『言語芸術作品の美学』、モスクワ、1979年) 以下、「テキストの問題」と略す。
- (2) 「認識」のモデル(自然科学の認識の原理である主観・客観モデル)というのは、世界の外に措定された抽象的な点である認識者の意識(主観)と、世界の内にある対象(客観)という

関係の図式であって、そのばあいの認識は、誰が観察者の位置に立っても普遍妥当になりたつような、一個の意識と物との関係になる（モノログ的な認識）。このモデルによって、哲学は学問の方法としてはすこぶる精密になったけれども、しかしその反面で、生きた人間の経験がもつ歴史的な一回性の問題をあつかえなくなってしまう。このことについて、バフチンは草稿「美的活動における作者と主人公」のなかでつぎのように述べている。

「認識の理論が、他のすべての文化領域の理論のモデルになった。倫理学すなわち行為の理論は、すでに実現された行為を認識する理論にとって代われ、美学すなわち美的活動の理論は、すでに実現された美的活動を認識する理論にとって代わられた。つまり、美的実現の事実そのものを直接、対象とするのではなく、この事実のありうべき理論上のトランスクリプション、この事実の認識を、美学の対象とすることになったのであり、このゆえに、できごとの実現の統一は、意識の統一、できごとの理解の統一にとって代われ、主体すなわちできごとの参加者は、できごとを傍観的に、純理論的に認識する主体になったのである。」  
(邦訳 220-221ページ)

- (3) Бахтин М.М. К философии поступка // Философия и социология науки и техники. Ежегодник 1984-1985. М., 1986. (バフチン「行為の哲学によせて」//『科学と技術の哲学と社会学。年鑑1984-1985』, モスクワ, 1986年) 以下、「行為の哲学」と略す。
- (4) Бахтин М.М. Автор и герой в эстетической деятельности // Бахтин М.М. Эстетика словесного творчества. М., 1979.; Бахтин М.М. Автор и герой в эстетической деятельности. Фрагмент первой главы // Бахтин М.М. Литературно-критические статьи. М., 1986. (バフチン「美的活動における作者と主人公」//バフチン『言語芸術作品の美学』, モスクワ, 1979年;バフチン「美的活動における作者と主人公・第一章断片」//バフチン『文芸批評論集』, モスクワ, 1986年) 以下、「作者と主人公」と略す。
- (5) Бахтин М.М. Проблема содержания, материала и формы в словесном художественном творчестве // Бахтин М.М. Вопросы литературы и эстетики. М., 1975. (バフチン「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」//バフチン『文学と美学の諸問題』, モスクワ, 1975年)
- (6) Волошинов В.Н. Слово в жизни и слово в поэзии // Звезда, 1926 №.6 (ヴォロシノフ「生活の言葉と詩の言葉」//「星」1926年6号); Волошинов В.Н. Фрейдизм. М.-Л., 1927. (ヴォロシノフ『フロイト主義』, モスクワ/レニングラード, 1927年); Медведев П.Н. Формальный метод в литературоведении. Л., 1928. (メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』, レニングラード, 1928年); Волошинов В.Н. Марксизм и философия языка. Л., 1929. (ヴォロシノフ『マルクス主義と言語哲学』, レニングラード, 1929年)  
バフチン・サークルのこれらの著作で俎上に載せられているのは、フロイト主義心理学、ロシア・フォルマリズムの詩学、ソシユール言語学という、当時の最もアクチュアルなイデオロギー的潮流であって、いずれもその根底にひそむのは、主体を解体せんとするバトス=文化のニヒリズムなのである。これらのイデオロギーにたいするマルクス主義の側からの批判というかたちでかれらは、現実社会にたいしてひらかれた社会的記号としての言葉の上での主体の救出をはかったわけなのである。
- (7) 1970年にモスクワで開かれた、バフチンの生誕75周年を祝う会でのヴァチャスラフ・イワノフの発言、および1973年のタルトゥ大学紀要『記号体系論集』VI (バフチン記念号)のイワノフの巻頭論文「記号・言表・対話についてのM・M・バフチンの思想が今日の記号論にたいしてもつ意義」(邦訳は「現代思想」1979年 2-3月号, 北岡誠司訳)。
- (8) Бахтин М.М. Проблемы творчества Достоевского. Л., 1929. (バフチン『ドストエフスキイの創作の諸問題』, レニングラード, 1929年) 以下、『ドストエフスキイ論』初版と略す。

- (9) この論文では、「言葉」「ことば」「言語」「発話」を、それぞれロシア語の слово, речь, язык, высказывание の意味でもちいている。
- (10) 発話を組織するものとしての社会的評価、アクセント、イントネーションの問題は、1920年代初めのバフチンの草稿「行為の哲学」「作者と主人公・第一章断片」のうちにすでにみられるものだが、メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』およびヴォロージノフの1930年の論文「発話の構造」(Волошинов В.Н. Конструкция высказывания // Литературная учеба, 1930 №3)では、つぎのように述べられている。

「発話の個別的現存とその意味の一般性、十全性とを統合するもの、意味を個別化し具体化するもの、そして言葉のいまとこの音響的現存を意味づけるものとしてのこの歴史的アクチュアリティこそ、われわれが社会的評価と呼ぶものなのである。

というのもまさしく社会的評価が発話をその事実としての現存の面からだけでなく、その有意味な意義の面からもアクチュアルなものにするからである。社会的評価が、対象や言葉や形式の選択と、その発話の枠内でのそれらの個別的な組み合わせを決定する。内容の選択も、形式の選択も、形式と内容のむすびつきも、社会的評価によって決まるのである。」(『文芸学の形式的方法』邦訳 269ページ)

「状況とその聴衆は、なによりもまず、ほかならぬイントネーションを決定する。そしてこのイントネーションを通して、語の選択とその順序をも決定する。イントネーションを通して、発話全体を意味づけるのである。イントネーションは、所与の状況における話者同士の社会的な関係を、最もしなやかに、最も鋭敏に伝えるものなのである。われわれが先に、発話は状況を解決するものであり、状況を総括的に評価するものである、と述べたさいに念頭においていたのは、なによりもまず、発話のイントネーションのことだったのである。これ以上われわれの考えを展開せず述べておこならば、イントネーションとは社会的評価の音響的な表現なのである。」(「発話の構造」第6章。邦訳72ページ)

- (11) それは、書かれたもの、ないしは演じられたものとしてのテキストに媒介された、複数の意識の交流の問題になるはずである。バフチンは1952-53年の草稿「ことばのジャンル」(Бахтин М.М. Проблема речевых жанров // Бахтин М.М. Эстетика словесного творчества. М., 1979.) のなかで、一次的なことばと二次的なことばの問題についてつぎのように述べている。

「長篇小説、ドラマ、あらゆる種類の学術研究論文、社会政治評論の大きな諸ジャンルその他の、二次的(複雑)なことばのジャンルが生ずるためには、複雑で比較的高度に発達した、組織された文化的コミュニケーション(とくに書きことばのそれ)が前提となる。つまり、芸術、学問、社会生活その他の領域のコミュニケーションが前提となる。これらの二次的なことばのジャンルはその形成の過程で、直接的な言語コミュニケーションのもとで生じたさまざまな一次的(単純)なことばのジャンルをみずからのうちに取り込み、つくり変える。それらの一次的なジャンルは、複雑なことばのジャンルの成分となることにより、そこで変化をとげて、特殊な性質を帯びようになる。それらは、現実ならびに現実の他者の発話にたいする、直接的な関係をうしなう。[中略] 一次的なジャンルと二次的なジャンルの相関、ならびに後者の歴史的形成の過程は、発話の本質(なによりもまず、言語とイデオロギーや世界観の相関という複雑な問題)に光をあてるものなのである。」(「ことばのジャンル」邦訳118-120ページ、下線は引用者)

- (12) Бахтин М.М. Слово в романе. Формы времени и хронотопа в романе. Из предьстории романного слова. Эпос и роман. // Бахтин М.М. Вопросы литературы и эстетики. М., 1975. (バフチン「小説の言葉」「小説の時間と時空間の諸形態」[以下、「小説の時空間」と略す]「小説の言葉の前身より」「叙事詩と長篇小説」//バフチン『文学と美学の諸問題』, モスクワ, 1975年);



Бахтин М.М. Роман воспитания и его значение в истории реализма // Бахтин М.М. Эстетика словесного творчества. М., 1979. (バフチン「教養小説とそのリアリズム史上の意義」〔以下、「ゲーテと教養小説」と略す〕//バフチン『言語芸術作品の美学』, モスクワ, 1979年)

- (13) 「小説の言葉」邦訳8ページ。  
 (14) 「小説の時空間」邦訳12ページ。  
 (15) ジャンルとしての小説にとって本質的なこの笑いの問題について、バフチンは「叙事詩と長篇小説」のなかでつぎのように述べている。

「叙事詩的距離が破壊され、人間像がはるかなる昔の背景から現在の（従って未来の）未完結な出来事をも含む接触の領域へと移って来ると、小説の中における（そしてその後には全文学の中における）人間像の根本的再構成がもたらされることになる。そしてこの過程で巨大な役割を演じたのが小説のフォークロア的、民衆的な笑いの源泉であった。この生成過程の最初の、きわめて本質的な段階は、人間像の笑いによる無遠慮な親密化であった。笑いは叙事詩的距離を破壊した。笑いは自由に無遠慮に人間を探究し始めた——人間を裏返しにし、外部と内部、可能性とその実現の間の不一致を暴き始めた。人間像の中に、本質的な力学、この人間を描く形象のさまざまな要素の間にある不一致、不協調の力学が持ちこまれた。人間は自分自身と一致することをやめた。」(邦訳 262ページ)

- (16) 「歴史的な記述・描写」の対象は、人間の行為（倫理的なもの＝善）であるから、「理論的思考」（認識＝真）、「美的直観」（観照＝美）とあわせて、真、善、美ということになる。  
 (17) 初期の二つの草稿「行為の哲学」「作者と主人公」で論じられている、「自分にとってのわたし для себя」「わたしにとっての他者 другой для меня」「他者にとってのわたし для другого」の関係にしても、結局は「わたし」を中心にして考えられた関係なのであり、「わたし」の側から見られた問題でしかない。そこには、行為する複数の意識のあいだの交通の問題は存在しない。  
 (18) この問題は、メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』（1928）の第一部「マルクス主義的文芸学の対象と課題」のなかで、土台—イデオロギー的環境—文学作品のあいだでの、存在のイデオロギー的な屈折（一次のおよび二次的な屈折）の問題として、すでに論じられていたものである。  
 (19) 「現在との接触を通して、〔芸術的表現の〕対象は世界の生成の未完結的過程に誘いこまれ、対象には未完結性の刻印がつけられることになる。時間的に私たちからいかに遠く離れていようとも、対象は中断することのない時間的移行の過程によって私たちの未完成の現在とつながり、私たちの未完成性、私たちの現在との関連を獲得し、私たちの現在は未完結の未来へと進むことになる。このような未完結的なコンテキストの中では、対象の意味上の不変性は失われる——その意味、意義はコンテキストのその後の展開の程度に応じて改新され成育する。芸術的イメージの構造においては根元的な変化がもたらされる。イメージは特殊な現実性を獲得する。いずれかの形および程度において、私たち——作者と読者——も本質的に関与している人生の、今も継続している出来事との関連性を得ることになる。」（「叙事詩と長篇小説」邦訳253-254ページ。〔 〕は引用者）  
 (20) 「小説の言葉」ではこの問題を、言語の機能上の特質という観点から、つぎのように説明している。

「別の言語を描写する言語は、その言語の外部と内部において同時に響くことができ、それについて語る可以同时に、その言語で語ることも、その言語と語ることもできる。また他方では、描き出される言語は同時に描写の対象となることも、自ら語ることもできるが、まさに言語のこのような諸能力によって、諸言語の特殊な小説的イメージの創造が可能

となる。」(邦訳 184ページ)

- (21) メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』では、フォルマリストの伝達の図式を批判して、次のような対話的な交通のモデルが打ち出されている。

「芸術作品もふくめてあらゆる発話が、交通とまったく不可分な情報なのである。それと同時に、作品はけっしてすっかり与えられた出来合いの情報なのではない。

伝達されるものは、伝達の形式、方法、具体的条件と切り放せない。情報そのものは、交通の生成にともなって生成するのである。ところがフォルマリストは作品を解釈するさいに、すっかり出来合いの不動の交通と、おなじく不動の情報を暗黙のうちに前提しているのである。

図式的にはこれはずいぶん表現することができる。すなわち、社会の二人の成員A(作者)とB(読者)があたえられている。両者のあいだの社会的関係はこのとき不変かつ不動である。AからBへただ伝えられるだけの出来合いの情報Xもあたえられている。この出来合いの情報Xでは「何が」(内容)と「いかに」(形式)が区別されており、そのばあい芸術の言葉の特徴は「表現への志向」(いかに)にある。[中略]

この図式は根本的にまちがっている。

実際には、AとBのあいだの関係はたえず変化し生成している。しかも伝達の過程そのもののなかで変化している。

出来合いの情報Xも存在しない。それはAとBのあいだの交通の過程で生成するのである。

さらに、それはけっしてある者から別の者へ伝えられるのではない。それは両者をつなぐイデオロギー的な橋として築かれる。両者の相互作用の過程で築かれるのである。しかもこの過程は、生成する作品のテーマ面の統一も、それを現に実現するさいの形式も規定している。双方を分離したり区別したりすることはできない。」(邦訳332-334ページ)

- (22) 純粹な描写の原理としての作者と、作者の形象(語り手)や作中人物との関係について、バフチンは「テキストの問題」の別の箇所でも次のように述べている。

「作者は、作品全体のうちに、それもより高いレベルにあるのであって、形象化(客体化)されて作品の一構成分子になることはけっしてない。それは、創り出された自然(natura creata)でも、生み出されかつ創り出す自然(natura naturata et creans)でもない。純粹な、創り出すが創り出されたのではない自然(natura creans et non creata)である。」

(邦訳 205-206ページ)

- (23) 作者とは時代や文化を異にする読者が、大きな時間のなかで作者と対話的に出会うことが可能なのは、作者と同時代の現実とのあいだに、バフチンが「小説の時空間」で指摘している、以下のような特別な関係があるからなのだ。

「第一に、作者は、その複雑さ・豊穡さのすべてをふくんだ、自分の所属する、完結することのない同時代から[描かれる出来事を]見る。しかも自らは、いわば、描くべき現実への接線ともいうべきものの上に居る。作者がそこから見る同時代は、そのうちに、何よりもまず、文学の領域もふくむ。それも、せまい意味での同時代の文学だけでなく、同時代のうちで生き新たなものに生れかわりつづける過去の文学の領域もふくむ。文学とさらに広く文化(それから文学を切り離すことはできない)の領野は、文学作品と作品のなかでの作者の立場との、不可欠なコンテクストとなる。このコンテクストを欠いては、作品も、作品のうちに反映した作者の意図も、理解できない。」(邦訳341-342ページ。〔 〕は引用者)

- (24) メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』第一部第一章では、個人によるイデオロギーの創造の行為と社会的交通の問題について、次のように述べられている。

「世界観でも、信仰でも、あるいはまた一時的な気分でさえも、それらが存在するのは、頭

のなかや「魂」のなかのような内部なのではない。それらは、言葉、行為、衣服、マナー、人間や物がかたちづくる組織といった、一定の記号的素材になることで初めてイデオロギー的現実になる。この素材をとおして、人間をとりまく現実の一部になるのである。〔中略〕

これまで学問は、イデオロギー的価値を創造し理解するさいの個人の生理学的プロセスやとくに心理学的プロセスにしか注意をはらわず、イデオロギーを創造するのは個人ではないこと、イデオロギー的な創造とその理解が社会的交通の過程ではじめて実現されることを見落としてきた。イデオロギーの創造にかかわる個人的行為はすべて、社会的交通の不可分の契機なのであり、この交通に従属する構成要素にすぎない。したがって、それらの個人的行為を意味づけている社会的過程全体をぬきにしては研究することが不可能である。」(邦訳21-22ページ)

- (25) 1952—53年の草稿「ことばのジャンル」のなかでバフチンは、発話の全体がもつ表情の問題について、次のように述べている。

「語の中立的な意義が、言語コミュニケーションの一定の現実の条件のもとで一定の現実に関係づけられることによって、表情の火花を生むのである。そしてまさにこれこそが、発話を創りだすプロセスで生じることなのである。くりかえして言うと、言語の意義と具体的な現実との接触だけが、発話のなかで生じる言語と現実とのこの接触だけが、表情の火花を生むのである。この火花は、言語体系のうちにあるのでもなければ、われわれを抜きにして存在する客観的現実のうちにあるのでもない。」(邦訳 165ページ)